

著者は野邊地尚義(たかよし)の玄孫、野邊地えりぎ(青木智子)である。幕末から明治、またそれ以後にかけて南部藩は原敬・齋藤実・米内光政などの歴代首相をはじめ、金田一京助・新渡戸稲造・石川啄木など多くの優れた人材を輩出した。そのなかにあつて、かれらの先達として活躍した一人の男、野邊地尚義の偉大な生涯が本書によってはじめて浮きぼりにされた。当時、我が国には、シーボルト事件・ペリーの浦賀来航・薩英戦争・長州戦争・戊辰戦争・明治維新など、などが次々と生起したが、その激動の時代に生き、南部藩を脱藩してまで他藩の要人(たとえば大村益次郎ほか)と交流し、さらには死を覚悟して雄飛した野邊地尚義の生きざまが流麗な筆遣いによって見事に描かれている。東京遷都ののち、尚義は京都にとどまり、日本初の公立女学校、「新英学校」および「女紅場」を創立、その校長として、9年間も女子教育の指導に当たった。その後、東京芝に我が国きっての高級クラブ「紅葉館」が設立されたとき、京都より招聘され、その経営に当たった。有名な鹿鳴館は紅葉館より二年遅く、明治政府によって現、内幸町に創立されたが、わずか7年で閉鎖されてしまった。これに対し、紅葉館は、芝の料亭として、明治・大正・昭和を生き延びたが、第二次世界大戦末期に閉鎖され、東京大空襲によって消失した。当時の華やかな面影を偲ぶものは無く、その跡地は東京タワーの駐車場になっているという。本書は、このような幕末の激動の歴史の中にあつて冷静に生き抜き、活躍した野邊地尚義の手腕と業績をコンパクトにまとめ挙げたものであり、明治の民間外交における陰の立役者、野邊地の生涯を余すことなく描き出したものとして高く評価されよう。

なお本書は、尚義の娘、野邊地りあ(里安子)について触れている。りあは、著者の曾祖母、立子の妹に当たり、名門校「雙葉学園」の四谷移転のころと深いかかわりをもつ。1909年に築地の仏和女学校が四谷に雙葉学園として移転すると、葵町にあった雙葉会もまた四谷に移転し、りあは雙葉会理事に就任。以後45年間にわたって語学教育に身を捧げた。尚義の子孫の方がたも多くは雙葉学園とご縁があり、また、雅子皇后さまのご縁も読み取れて、その家系は子々孫々に至るまで見事である。

また、著者が自分の足で実際に尚義の足跡の地を歩き、検証を重ねている点も見逃せない。本書を読んで、東京人なら、紅葉館跡はもちろん、大村益次郎が開き、尚義が入塾した鳩居堂跡(英国大使館の近く)など、また京都人なら、「新英学校」および「女紅場」跡などを再確認したいと思うのは私だけではないと思う。